

令和 3 年 6 月 21 日現在

機関番号：32689

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2020

課題番号：18K12235

研究課題名(和文) 明治期京阪文化人ネットワークと同時代演劇の交流をめぐる総合的研究

研究課題名(英文) Comprehensive research on the exchange of contemporary theater with Network of cultural figures in Kyoto and Osaka during the Meiji era

研究代表者

後藤 隆基 (GOTO, Ryuki)

早稲田大学・坪内博士記念演劇博物館・助教

研究者番号：00770851

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、従来、東京の動向を中心に研究されてきた明治期の文化研究を京阪という視座から検討し、同時代演劇とその周辺を取り巻く諸文化との関係について、人的ネットワークを中心に講究した。とくに、関西新派の演劇史的意義の再評価、京阪演劇・文学・文化において重要な文業を残した高安月郊の未発表書簡の調査・整理、文学者との交流を通して明治期京阪から発信された翻案劇による東アジア表象の分析、大阪屈指の財閥である住友家と上方歌舞伎の主導的地歩を占めた片岡仁左衛門家の関係の検討を通して政財界等のパトロネージによる同時代演劇への影響について解明し、明治期京阪文化研究の新たな視座を提示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、明治期文化研究を京阪という視座から捉え返し、演劇と同時代文化・社会との接続性について明らかにしたものである。演劇がそれ自体で成立するものでなく、隣接領域との関係と横断的ネットワークのなかで生成・受容・展開する様相を、一次資料や同時代紙誌等の調査により、実証的に検討した。従来の東京中心の研究にとどまらず、京阪の事例を講究した点で、文化研究における新機軸を打ち出しえたと考えられる。また、それらの研究成果は国際学会等でも発表し、ひろく日本文化の再検討の機会を創出した。

研究成果の概要(英文)：Cultural studies in the Meiji era have focused on trends in Tokyo, but in this study, I examined cases in Kyoto and Osaka, the relationship between contemporary theater and the cultures surrounding it, focusing on human networks. In particular, I conducted research on the following points. (1) Re-evaluation of the historical significance of the Kansai Shinpa theater. (2) Investigation and arrangement of unpublished letters in the suburbs of TAKAYASU Gekko, which left important literary work in culture of Kyoto and Osaka. (3) Analysis of East Asian representation by adaptation drama through interaction with literary figures. (4) Impact on contemporary theater by patronage of the political and business world through examination of the relationship between the Sumitomo family, one of the leading conglomerates in Osaka, and the KATAOKA Nizaemon family, who occupied the leading position of Kabuki in Osaka. Through them, I presented a new perspective on cultural studies during the Meiji era.

研究分野：日本文学、芸術学

キーワード：新派 京阪文化人 高安月郊 翻案劇 パトロネージ 近代日本演劇 歌舞伎

## 1. 研究開始当初の背景

近代日本演劇研究は、長く東京の動向を中心に論じられてきた。明治期の演劇に関する最初の通史である伊原敏郎『明治演劇史』(1933)は「明治の革新によつて東京が政治や文化の中心となつたため、その劇壇はますます発展すると同時に、京阪のそれは終に頽廢してしまつた」と述べており、河竹繁俊『日本演劇全史』(1959)も、明治期の京阪劇壇は東京に較べて新しい動きに欠け、後世への影響も小さいとしている。

ただし、明治期の演劇に関する新動向が多く京阪から発信され、東京に波及・展開したことは、小櫃万津男が「大阪演劇改良会とその周辺」(『日本演劇学会紀要』1966.6)「関西新派“成美団”の研究」(同前 1968.10)、「『京都演劇改良会』の研究」(同前 1979.10)で指摘しており、また明治期以降の新聞記事や番付等の情報を収録した国立劇場近代歌舞伎年表編纂室編『近代歌舞伎年表』の「大阪篇」全9巻(1986-95)・「京都篇」全11巻(1995-2005)によって、資料面から研究の基盤形成に一定の方向性が示された。にもかかわらず、その後も、明治期京阪演劇に関する体系的な研究はなされてこなかった。

近年、興行会社・劇場の経営手法について論じた寺田詩麻「明治三十年代京都の松竹 その経営の性質」(『演劇研究センター紀要』2006.1)や神田由築「明治期の道頓堀劇場の経営」(『大阪商業大学商業史博物館紀要』2011.10) 明治前期京阪歌舞伎の史的意義を究明した日置貴之『変貌する時代の中の歌舞伎 幕末・明治期歌舞伎史』(2016)が公刊され、報告者も『高安月郊研究 明治期京阪演劇の革新者』(2018)をはじめ、明治30年代の演劇改良運動に関わる成果を発表してきた。しかし明治期京阪演劇および文化的動態は、研究対象としてその重要性が着目されつつあるものの、東京の動向に比重が置かれる現行の研究では傍流にとどまり、基礎的な研究も立ち遅れているのが現状である。

本研究課題の核心は、明治期京阪をとりまく領域横断的な文化人ネットワークの実態解明を通して、同時代演劇の近代化をめぐる具体的様相を京阪という視座から実証的な手続きによって明らかにするという問題設定にある。それら2点の有機的な接合を試みる包括的な研究はこれまで皆無であったという背景があった。

## 2. 研究の目的

本研究における研究目的は、以下の3点である。

- (1) 明治期京阪における文化人ネットワークの基礎的情報の調査・整理と、その立体的把握を行う。とくに、高安月郊らが支柱的役割を担ったサロンの集団について、多彩な分野の文化人からなる構成員とその人脈・活動内容・集団の形成過程・文化史的意義などを総合的に検討する。また、同時期には大阪でも文学者による団体や演劇改良団体が結成されていた。京阪間の差異・共通点にも目配りしながら、同時代資料等を用いた実証的研究によって、彼らのネットワークの全容を踏査していく。その上で、明治期の京阪におけるジャンル横断的な文化交流の動態を解明する。
- (2) 京阪文化人ネットワークと同時代演劇との交流や影響関係の具体的様相について検討する。京都演劇改良会などの演劇改良運動や個別の演劇生成等に、いかに同時代の文化人ネットワークが影響を及ぼしていたのか。文学・美術・音楽等の諸分野とのジャンルを超えた交流にくわえて、政財界・花柳界等のパトロンも視野に入れながら、具体的な作品についても幅広くとりあげる。(1)で得られた知見をもとに、東京と異なる明治期京阪の演劇的特徴・社会的機能等を探り、同時代の社会背景や観客の受容状況等についても併せて検討する。ひいては近代日本演劇史・文化史の展開を捕捉しなおし、他領域からも参照可能な新たな研究フィールドを掘り起こす。
- (3) これまでの近代演劇史/研究において、なぜ明治期京阪演劇が評価・検討されてこなかったのか、先行研究の批判的検討を通して確認したうえで、上記(1)(2)の成果を総合し、従来の東京中心の演劇研究と異なる問題編成を行い、東京と異なる先駆的かつ独自の史的展開を果たしながら、近代日本演劇研究の空白領域であり続けてきた明治期京阪演劇の史的意義と重要性を再評価・再定義する。

## 3. 研究の方法

本研究の主たる方法は、同時代資料や関連文献等の博搜が基本的な作業である。とくに人的・物的交流に関する資料は、前掲した『近代歌舞伎年表』に未載のものも歴大であり、従来探索の及んでいない同時代の新聞・雑誌記事(時評・雑報・作品等)や、関係者による証言・回想等の文献、書簡の探索・分析が不可欠である。さらに具体的な演劇作品を検討する際には、番付・筋書・台本等も併せて調査した。

調査にあたっては、各地の図書館、資料館等の諸機関に所蔵される関連資料の閲覧・整理を行った(調査先は、国立国会図書館、日本芸術文化振興会伝統芸能情報館、松竹大谷図書館、東京

大学明治新聞雑誌文庫、早稲田大学演劇博物館、日本近代文学館、阪急文化財団池田文庫、大阪府立中之島図書館、大阪歴史博物館、京都文化博物館、京都府立京都学・歴史館)。

また、明治期京阪文化を牽引した高安月郊の未発表書簡を、高安家のご遺族より閲覧の機会をいただき、調査・整理を行った。

#### 4. 研究成果

本研究においては、以下の成果が得られた。

##### (1) 明治30年代京阪文化人ネットワークの実態解明

明治30年代の京阪で、諸分野の文化人たちが結成していたサロンの集団 とくに京都における「銀峰会」と「詩人会」は、作家の高安月郊、島華水らが設立したもので、文芸・美術の研究を目的に古今の珍書名画の蒐集・内覧等も行い、京都演劇改良会との関係を通して同時代劇壇にもつながりを持っていた。しかしいずれの集団も基礎的情報に乏しく、これまでその実態は正確に知られてこなかった。演劇内外の諸領域に及ぶ先行研究の精査・整理・検討を経て、上記2団体の構成員や活動の内容と動向、成立から解体に至る経緯、文化史的意義等を、同時代の新聞・雑誌記事(時評・雑報・作品等)や、各メンバーの証言・回想が記された文献および書簡等の調査によって明らかにした。なお書簡については、報告者が高安月郊のご遺族から委託を受けた未公開書簡(10通)の調査・整理を行い、翻刻作業が終了次第、公開する予定である。

##### (2) 文化人ネットワークと同時代演劇の交流・影響関係の検討

明治期京阪の文化人ネットワークと同時代演劇との交流・影響関係を俎上に載せ、個別の作家や俳優の動向、作品分析を行った。

洋画家の浅井忠は、京都高等工芸学校教授就任後(1902)に高安月郊と知遇を得、京都演劇改良会後援による『大塩平八郎』(月郊作、1902)の背景画を依頼されたことが契機となって複数の 舞台美術 を手がけた。それらは近代美術と演劇の接合として早い時期の試みであり、浅井以外の画家も含め、東京の状況とも比較しながら、明治期における 舞台美術 の概念とその様相を明らかにした。

月郊とともに、京阪文化の展開を主導した京都帝国大学図書館長で英文学者の島華水は、明治30年代京阪の新演劇(新派)でシェイクスピアやモリエール等、数々の翻案劇を上演しており、作品の舞台を日本国内だけでなく、韓国、台湾に置き換える特徴を有していた。京阪新演劇(新派)の実態解明にとどまらず 翻案 を介した西洋文学・思潮・文化受容、日清・日露戦争下の日本における東アジアへのまなざしという観点からも、近代日本演劇・文学・文化の多様性を捉え直すことが可能となった。

住友財閥の十五代住友吉左衛門(春翠)は、片岡我當(十一代目仁左衛門)が『乳姉妹』(菊池幽芳原作)を大阪で上演した際、当時の「上流社会」の言語・動作指導、衣裳の貸与、一族を率いての観劇等の支援を行っている。春翠のみならず、その母登久は歌舞伎を愛好し、殊に片岡仁左衛門家の鼻根であったことを明らかにし、明治20~30年代における財界のパトローネージによる同時代演劇への影響についても講究した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 後藤隆基	4. 巻 36
2. 論文標題 住友家と歌舞伎：明治中後期における片岡仁左衛門家との交流	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 泉屋博古館紀要	6. 最初と最後の頁 25-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 後藤隆基
2. 発表標題 未来の表象：明治期の東アジアと日本演劇
3. 学会等名 2019 2nd International East Asia Next Generation Researchers Forum（翰林大学日本学研究所）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 後藤隆基
2. 発表標題 新派と岸田國士
3. 学会等名 歌舞伎学会 秋季大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 後藤隆基
2. 発表標題 初代水谷八重子と演劇博物館蔵資料について
3. 学会等名 新派の 芸 を語る：初代水谷八重子の記憶とともに（早稲田大学演劇博物館）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 後藤隆基
2. 発表標題 関西新派の多様性：静間小次郎という現象
3. 学会等名 立教大学文学部文学科日本文学専修主催シンポジウム「新派再考」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 後藤隆基
2. 発表標題 明治期京阪における新派の生成・受容・展開
3. 学会等名 立教SFR共同プロジェクト研究 国際論壇「娯楽市場と芸態」（国際学会）
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 神山彰、後藤隆基 他	4. 発行年 2020年
2. 出版社 森話社	5. 総ページ数 未定
3. 書名 20世紀の演劇とメディア（仮）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------